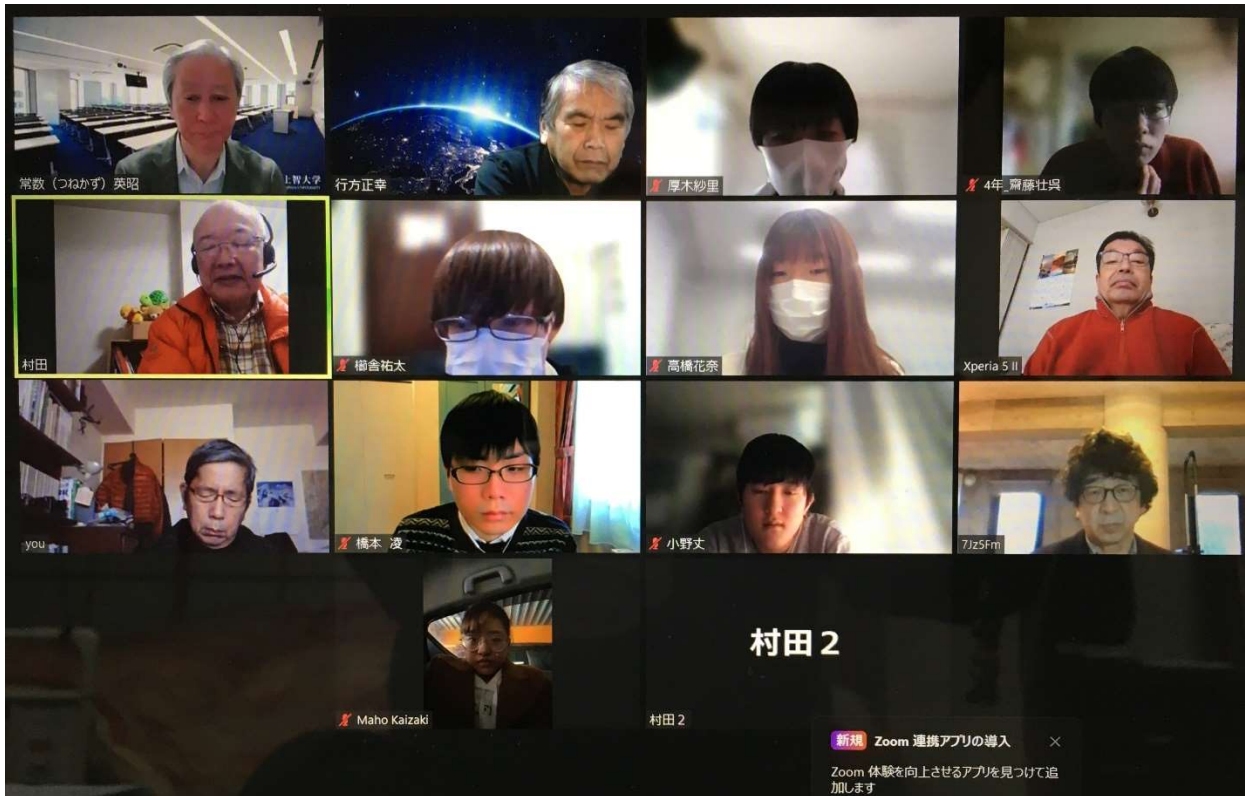


2022年4月15日配信

稲山会オンライン通信⑤

発行人：行方正幸 発行所：稲門山の会事務局 TEL 03-3367-3723 FAX 03-3367-8150 ©稲門山の会1998

I 2022年稲門山の会オンライン総会の報告



(1) 2022年総会の概要

2022年2月6日(日)10:00～11:30に、常数英昭副代表の司会でオンラインで総会を開催した。出席者は稲門山の会役員及び役員予定者並びに早大山の会新旧三役13人、ハガキ等による書面決議63通で総会は有効に成立していると報告があり、次のとおり総会が始まった。

① 代表挨拶 事業報告等

昨年(2021年)の12月に逝去された丹藤茂(S53卒)君に黙祷を捧げたあと、行方代表から第1号議案【第2021年度事業等報告】について次のとおりの説明があった。

2022年度の稲門山の会を取り巻く現状については、今年度も全世界的に新型コロナウイルスが猛威を振るい、1月7日～10月1日の間、首都圏、関西圏を中心に緊急事態宣言が発令され、大学の授業、サークル活動ばかりでなく、当会の活動も大きく影響を受けることになった。

一方、登山界に目を向けると、緊急事態で県境を跨ぐ移動の禁止や自粛の波で、各地の山開きなど行事も中止となり、予約なしの山小屋やテント場の宿泊は許されず、当会の春のハイキング、秋のハイキングも新型コロナ感染防止の観点から中止とした。

しかし、当会の活動は、オンラインを活用することにより、役員会（3回）やコーチ会（4回）などの会合は、例年なみに開催することができた。また、会報の発行等も、OBや現役から多数の投稿やご意見をいただき、会報2回、オンライン通信4回を発行することができた。

現役の活動も個人山行を中心に次第に軌道にのり、長かったコロナ禍のトンネルを抜け出て、やっと光明が見えてきました。その一端をご紹介しますと、新人歓迎ハイキング等を含め、個人山行を中心に昨年度は20数回の登山活動が行われました。殊に、6月北岳、7月八ヶ岳、8月槍ヶ岳とステップアップして10月の穂高の大キレットを縦走したのは、計画的な登山の取り組みとして大きな一歩を踏み出し、充実した一年になったと思う。遭難とコロナによる二年間のブランクで、経験や技術の継承が中断したこと、今年度も引き続き現役学生の技術や施設面での支援をしていく所存です。具体的には本年の夏合宿に必要な大型テント1式を寄贈することとした。

まだまだ、コロナの行先は不透明ですが、今年度は自粛ばかりではなく是非とも現役学生とOBの合同キャンプや合同ハイキングのようなもの企画し、OBも現役学生も以前のように安全で楽しい登山や親睦を深めることができるよう尽力していく。

② 会計監事報告

続いて柴原OB（会計担当）から別紙(P3)「2021年会計報告」のとおり、第2号議案の説明がありました。2月1日時点の会費の納入者は67人で、昨年は99人で新型コロナの影響等により32人減っています。会費は山の会活動の根幹であり、会費の納入の促進するため、60歳未満の近年卒業者に呼びかけて、新しい名簿をつくる等会員拡大を図り、納入促進を図りたい。

【ゆうちょ銀行内の振替…振込口座番号：00100 - 2 - 333067：稲門山の会】

【他行からの振込…ゆうちょ銀行+店番号(018)+普通預金5130715：稲門山の会】

③ 退任・新任役員と担当の変更

続いて行方代表から次のとおり退任・新任役員と担当の変更について説明がありました。

退任役員	倉川秀明(S51年卒)	副代表、コーチ会担当
新任役員	村田宣男(S52年卒)	コーチ会担当
担当の変更	鹿間行喜(S52年卒)	コーチ会担当

その後、議案の採択に入り、第1号議案、第2号議案、第3号議案ともに、賛成73、反対0で、議案に対する意見も特になしということで、採択された。

④ その他

総会は約30分で終了したので、残り時間で、新任役員等の自己紹介（次ページ参照）、海崎前幹事長他旧三役、櫛舎新幹事長他新三役から現役の活動報告があり、30分ほど常務副代表の司会でOBと現役の意見交換を行って、2022年のオンライン総会は閉会となった。

					2022年2月1日	
2021年度会計報告(2021年1月1日～12月31日)						
					稲門山の会	
					単位:円	
項目		収入	支出	残高	備考欄	
前期からの繰越額				3,155,713		
年会費(振込分)		396,000			4,000円×99人	
年会費(新年会時入金)		0			新年会不開催	
新年会会費		0			同上	
預金受取利息		25				
収入合計		396,025				
新年会キャンセル料			33,350		大隈会館へ支払い	
ZOOM使用料			17,325		役員会等に使用	
稲山会通信42号、43号			55,070			
会議費			6,230		20年11月分立替金精算	
銀行振込手数料			2,530		7件分	
ホームページ管理料			43,740			
事務局費用			100,000			
支出合計			258,245			
収支合計		396,025	258,245	137,780	3,293,493	
項目別預金残高内訳書						
一般会計	ゆうちょ銀行			80,105	通帳残高額を確認済	①
	年会費入金振替郵便口座			587,432	通帳残高額を確認済	②
	みずほ銀行普通預金口座			767,365	通帳残高額を確認済	③
特別会計	遭難対策費(ゆうちょ銀行定期預金)			843,000	通帳残高額を確認済	④
	遭難対策費(みずほ銀行定期預金)			1,015,591	通帳残高額を確認済	⑤
	合計			3,293,493		
上記の会計報告を致します。						
会計幹事 柴原至						
(代表が銀行通帳残高書と照合確認済み)						

Ⅱ 早稲田大学及びOBからのお知らせ

1. 私の山登りと海外体験記

—人生記録—

打矢之威OB(S39年卒)

1月に打矢之威OB(S39年卒)から一冊の本が届きました。「私の山登りと海外体験記—人生記録—」打矢さんの半生を綴った自費出版で、余りに面白くて、アッと言うか間に読破してしまいました。

打矢さんは5人兄弟の4男で自由奔放に育てられ、本人いわく「学生時代(独協学園高校、早稲田大学)は山登りに熱中し、教室にいるより山小屋やテントで寝ることが多く、『お前は商学部ではなく山岳部で入学だ』と兄たちの囂聲をかけていました。従って成績は最低、1962年に貿易商社に入ったのはひたすら外国に行きたかったのが理由です」とあります。

打矢青年はめでたく1967年にアフリカ、中近東要員としてレバノンのベイルートへ赴任し、中東13ヶ国を飛び回っていました。1970年6月には過激派のPFLPの人質になって脱出したり、右翼の大物田中清玄氏とバハレーン皇太子の結婚式に出席したり、広島大手観光会社の社長と新ホテルのこけら落としイベントのベリリーダンサーを中東各国で探し回るなど波乱万丈の商社マン時代を過ごしたそうです。

商社を1981年に退社して、自分で貿易会社を作ってから現在まで日本と米国ポートランドを行き来する生活を送っています。その間、数度のヒマラヤトレッキング、サンチャゴコンポステーラ、ルルド巡礼、オーストリア・アルプストレッキング、オレゴン州フッド山登頂。ワシントン州レーニエ山トレッキングなど仕事と趣味の登山の両輪で大活躍、本当に打矢さんの旺盛な行動力と、ご家族、特に奥様の懐のおおきさには脱帽の自叙伝です。

この本を読みたい方は打矢OB又は行方正幸宛てにご連絡ください。

打矢之威 yukitoshi.uchiya@gmail.com

行方正幸 yukuemnamaekata@gmail.com

(文責：行方正幸)

(注記) 内容の一部が稲門山の会 HP→OB 会トップ
→会員の海外山行でアップ(笠原OB記S40卒)

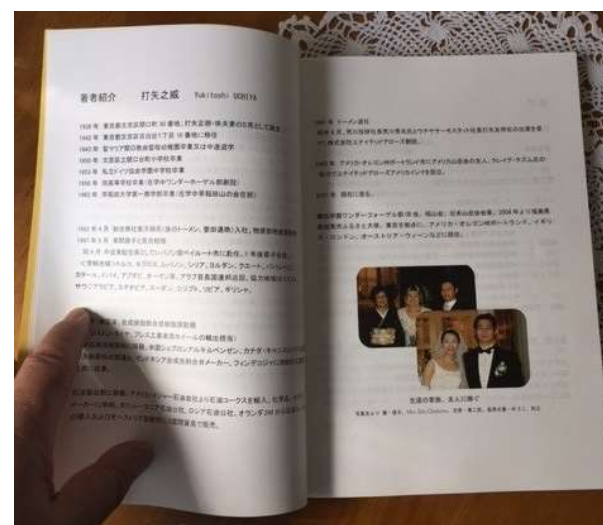
(注1) サンチャゴデコンポステーラ巡礼の旅

(注2) アラスカ(デナリ～氷瀑)の旅

(注3) ヒマラヤプーンヒルトレッキング

(注4) ブータン紀行

(注5) オーストリア・アルプス紀行



2. ネパールの山岳案内人シェルパ族の窮状



若い頃から、私はスポーツ的ピークハンティングやバリエーション登山に熱中してきたが、歳を撮ると登山に精神的な意義を感じるようになった。(中略)

ご縁があり兄がカトマンズの旅行会社を営んでいるラジブ氏と親交を重ねていたこともあり、大学時代の山仲間と2回にわたりブータンとネパールを訪問した。

今から8年前の2014年4月、まずアンナプルナトレッキングに行った。80歳に届かぬ後期高齢者の年代で、未開地訪問は魅力的であった。

現地の案内人とボッカは、HOSHI TREK というシェルパの組合会社で親分(社長)はパダム・チャムリンという50歳台の中年男性である。部下の“ジャパン”とか“ビル”とか源氏名の若者が我々のキャンプ用具や食料を担いで一行の前後に従った。バカでかい荷物を背負うが平均40 kg、70 kgくらい担ぐという。大学時代の合宿で30 kgのキスリングを背負わされてバテバテになったのを思い出して感心した。彼らは重量で賃金が支払われるとのことで、生活がかかっている。

ある夜パダムの家に招待されたが、何人家族がいるのかわからない。狭く暗く食堂にゴチャゴチャ大勢いた。彼らを養うのは大変だなと感じた。

1回目のブータン訪問の後、アンナプルナトレッキングを楽しんだが、ラジブ氏にカトマンズの世界遺産地域にある神社仏閣、王宮やパルダール広場の名所、或いは死者を茶毘にしている川向の火葬場所なども案内してもらった。我々の居る川筋の古い寺院には今にもあの世に行く風勢の老人僧が何人も座禅を組んでおり、狭い対岸では薪を積んで白衣に包まれた遺体を何体も火葬していて、いやな匂いが漂っていた。正に現世と後世が向かい合っている場所だった。さて、我々が帰国した10日後にネパールで大地震が発生した。ヒマラヤトレッキングの中の外国人登山者が雪崩や岩崩に巻き込まれて多数遭難した。10日遅れていたら我々も遭難したかもしれない。発展途上の国なので民衆は大変な苦勞を味わっているなど想像していたが、翌年11月にエベレストトレッキングの計画があり、その前の9月にアラスカのマッキンレートレッキングに行った後で帯状疱疹も発生していたので迷ったが結局行くことにした。

大地震の崩れた痕跡はあちらこちらに見られて、崩れた民家、寺院、世界遺産の由緒ある建物も修理できず応急措置をしていたり、そのまま放置されていた。庶民の生活は困窮しており、ガソリン不足や物資不足でストライキ頻発、ルクラに飛ぶコピューターも間引き運転だった。しかし、外国人旅行者は徐々に増えてきて、パダム達は本来のボッカ業に支障は出ていないように見受けられた。

この時の山行の最終目的地はコンデという 5000m の山だったが、私はナムチェで沈滞、体調が戻ったので、エベレストとローツェやアマダブラムを遠望する場所まで単独行動するだけ。まずはルクラから海拔 4000m のナムチェバザアル村(エベレスト登山の出発地でシェルパの里)まで山村部を縫って深い谷を降りたり、峡谷にかかった不安定な吊橋を渡ったり、標高差 800m もある急峻な石畳の坂道を 1 日中歩いたり、の長丁場のルートだ。



ポカラ湖畔に写るアンナブルナ、マチャブチャレ

吊橋の途中で、大きな荷物を両側に括り付けたヤク牛に出くわすと逃げることもできず、左右に張り出た鋭い角に刺されるかと恐怖を感じた。ルクラ出発時から腹の調子が悪く、いっこうに付いていけない。パダムが心配して先頭に付いてくれたり、戻ってきて私の世話をしたり大変な苦勞をかけた。若いジャパンを私専用の従者のごとくつけてくれたが、何回もダウン、結局途中の粗末な民宿に倒れこんだ。暖房もなく板の間に寝袋を広げて潜り込み、ガタガタ震えて寝るどころではない。極度に貧しい環境なので、暖房もままならないのだろうが、贅沢な生活環境に慣れた日本人には耐えられる状況ではなかった。

この様にエベレストトレッキングは途中で挫折して後悔の残る山行だったが、シェルパ達の従順さ、素朴さ、親切心に極めて感銘を受け思い出深い旅になった。

さて、CIVID - 19(新型コロナ感染症)が 2019 年の 1 月頃から中国で流行し始めたが、私は 2 月中旬からドイツ、イギリス、ベルギー、イタリアと代理店訪問をした。ジュッセルドルフのユーロショップ展示会を視察したが、中国人の旅行客も大勢見かけた。その頃欧州諸国はコロナに殆ど無関心だった。私は発生源の中国が欧州に撒散らしたと思っている。北米でも南米でも経済発展を遂げた中国人がいたところに存在していた。発生源の中国がロックダウンの強権で抑え込んだが、その後世界中に広がった。中国はこの成果を誇り、逆にマスク、衛生器具、ワクチン等必需品を世界中に売りまくる恩を押し付けているが、そもそも中国がこの疫病を発生させた張本人で、まさにマッチで火をつけ、消火器を売りつける“マッチポンプ”商法である。中国共産党は悪徳商人と言わざるを得ない。

閑話休題。毎年パダムはネパールの夏のオフシーズンには日本の山小屋に出稼ぎに来ていた。大家族を養うには外国人ヒマラヤ登山者の案内だけでは食えないという。ところが、状況は一変した。ネパールも CIVID - 19 の広がりで見込みに成らず鎖国になり、外国人観光客は皆無、そしてカトマンズは窒息状態になった。パダムも失業して生活できないことがわかった。これはなんとかしないとパダムもジャパンもビルも路頭に迷う。日本の困窮所帯と苦しさの程度が違うのは現地を見ている私としてはよく分かった。そこでヒマラヤでパダム達に世話になった大学時代の山仲間 6 人を誘って義援金を送ることにした。2 回に分けて 40 万円何がしを送金したが、喜ぶことか、写真のようにシェルパ達 5—6 所帯の生活実需品(コメ、塩、豆)を大きな袋入りで購入することができ、餓死しないで済むと全員から礼が来た。スズメの涙のような支援だが、日本人に対するネパール人の印象を良くしたかなと思っている。



追伸

そこで今回、稲山会OBに提案したかったのは下記意図です。

1. 単にシェルパ救援の寄付金集めでは意義を感じるOBは少ないだろうから、世界的にコロナが終息したらヒマラヤトレッキング実行を計画しているOBに呼びかける。
2. 実行の時期は早くて今年後半以降になるでしょうが、其の費用の一部を現地で世話になるシェルパの責任者に先払いして、彼等の直近の窮状を救う。
3. 万が一、この前払費用が無効に成らない様に私が責任を持って監視し実行させる。
4. 以上に加え稲山会としてのヒマラヤ遠征計画を立て其れに組み入れていただければ、会としてのヒマラヤ山行の嚆矢になるだろう。以上の様に考えた次第です。

【打矢、横浜、2月13日午後3時45分発信】

打矢 OB の企画している、コロナ禍のシェルパ支援トレッキングツアーに参加したい会員、又は興味ある会員の皆さん、下記に問い合わせ下さい。

打矢之威 yukitoshi.uchiya@gmail.com

トレッキングツアーは参加者希望者が多いほど、この企画は具体化され、支援内容も大きくなります。よろしく願います。なお、稲門山の会(OB 会)の取組みについては、役員会等で検討した上で、決定したいと思います。

稲門山の会代表 行方 正幸

Ⅲ OB・現役の近況及び山行報告

1. 奥多摩三山～御岳山報告

記：笠原 豊（S40 卒）

コロナ新規感染数の落ち着きを待って根雪の富士山を眺めに奥多摩三山を縦走したので報告します。



1. 日時：2021 年 11/10（水）～11/12（金）

2. メンバー：笠原豊（昭 40 卒）

3. 概 要

第 1 日：11/10（水）：武蔵五日市→檜原都民の森→三頭山避難小屋

出だしにトラブル（注 1）があり檜原都民の森着は 12:38 と遅くなった。バス道を少し戻る登山道口から入らず、森林館へ向かったのでウッドチップを敷き詰めた遊歩道を回り三頭大滝の前の吊橋に 14 時に着いた。



檜原都民の森のバス停横には奥多摩周遊道路が通っているので沢山駐車していた。



森林館へ向かい左の水平道へ入った。途中の看板「～の地質」（後記：参照）

三頭大滝が落差 35m で懸かっていた。地質図（後添）を見ると、三頭山にマグマの貫入があり

西と東に石英閃緑岩で現れ、東側の貫入層は南東へ延びて三頭大滝の西を通り、貫入境界部がホルンヘルス（熱変成岩）を生じて硬く急斜面を形成していた。この先2泊は水場不自由と予想し早めに4L採水したが石英閃緑岩地帯を過ぎると水流は途絶えた。三頭山はブナの純林が広がり枯葉で覆いつくされていた。紅葉の時期を過ぎたためか葉の落ちた乾いた景色だった。

ムシカリ峠で日没を迎えたので三頭山避難小屋へ入った。小屋は綺麗に掃除されていた。



三頭山避難小屋

第2日：三頭山避難小屋～三頭山～御前山避難小屋



三頭山西峰自撮

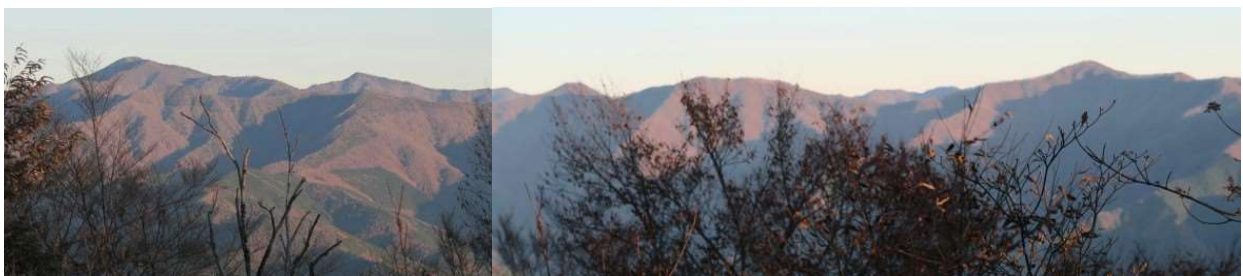
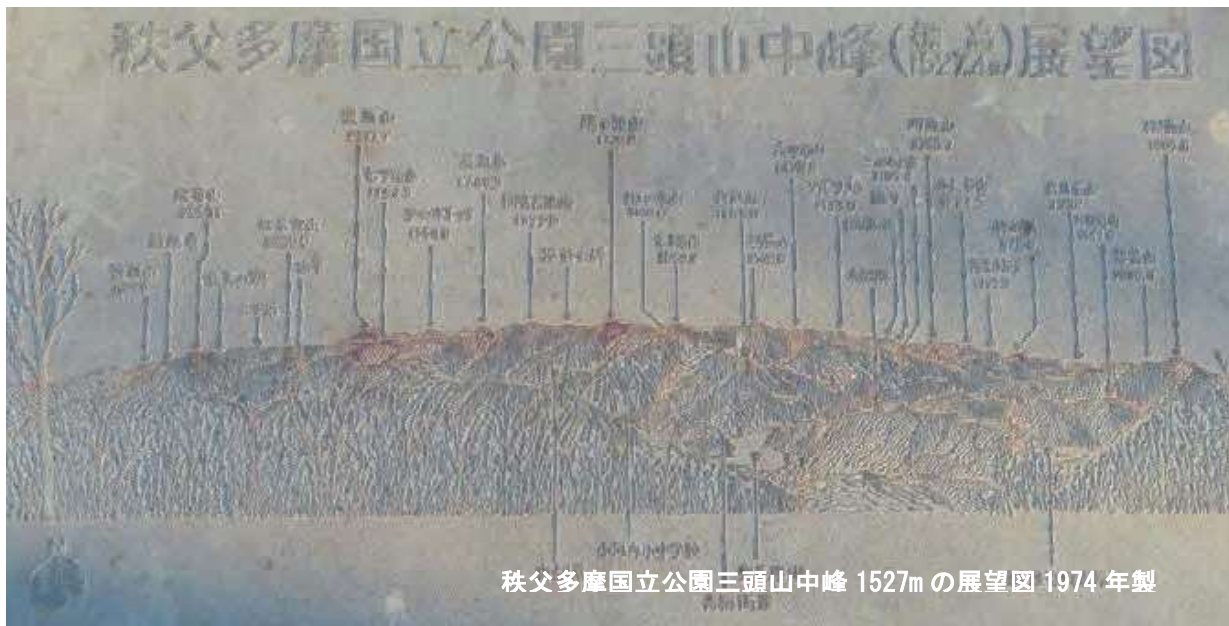
朝の小屋内5℃。ライトを着けて出発し、霜柱の三頭山西峰 1524.5m に着くと日の出を過ぎていた。

富士山は三頭山から南南西方にあり、朝日が陰影を作り冒頭の画像が得られた。中景の高さ約1100mの稜線の向こうは桂川の谷となって遮るものがないので、三頭山は見通しの良い富士山展望台となってい

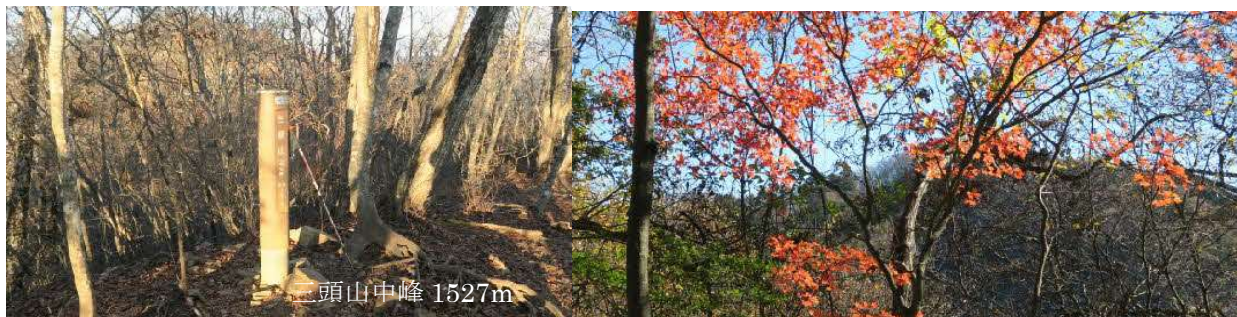
前日の疲れと冷えで左膝内側にこわばりがあった。積もった枯葉で滑りやすく速度を上げられず、休憩の回数と時間が増えた。



三頭山中央峰 1531m での表示板



笠取山～唐松尾山～飛龍山～雲取山の稜線



途中、路が分かれる箇所が数回あり、「ブナの路」を優先したが、そうでない方が楽（巻道）な場合があった。



途中、ドリーネ（掘鉢穴）地形の表示板があった。地質図上に同地点の記載はないが地下に石灰岩質があるのだろう。その後もドリーネらしい地形を2回見た。御前山の西には石灰岩の分

布が示されている。

風張峠を過ぎ一旦車道へ出た。月夜見第2駐車場まで車道と思っていたが、路側帯が無くなった地点に居合わせた登山者の助言に従って月夜見山の登山道を歩いたが上下と距離が増した。



枯葉でルートが見えにくい



奥多摩周遊道路

御前山手前の鞍部で日が暮れ、ビバークも考えたがヘッドランプで行動した。鞍部からの600m登りが身体にこたえた。足場が掘られ段差大きく左膝腱部のこわばりで捗らなかった。日暮れた御前山1405mを17:43に越え、避難小屋まで地図上5分の記載を15分掛かかった。同宿登山者1名。水場の水は汚染情報により煮沸した。オートミール・ピーナツ・煎大豆に湯を加え、スキムミルクで味付けしたお粥で食事とした。



枯葉の路 延々



御前山

第3日：御前山避難小屋～大岳山～御岳山～御岳駅



御前山避難小屋：全面ガラス窓とテラスがあり快適
汚染が及んだのか？

小屋前の水場：御前山頂部からの人的



枝の葉は落ちたが林の中は眺望が効かない。



大ダワのトイレ



大ダワの林道南側通行止め



大ダワの林道北側：奥多摩駅の多摩川上流側へ通じる。



大岳山 1266m は意外と急な岩道や鎖場があった。地質図を見ると、砂岩及び砂岩泥岩互層の中でチャートが鋸山、大岳山及び大岳山荘北東の各所で北西―南東へ走行しており、現地の歩きにくい岩場と一致していた。

12 時過ぎに登頂すると登山者大勢だったが 13 時にいなくなった。





大岳山からの富士山も良く見通せたが午後になると雲が湧き隠されてしまった。大岳山頂で風に吹かれながらシャッターを押したが撮れていた。手振れキャンセル効果が効いたのか？

2015年の会山行時には大岳神社で辞めていたが山頂からの眺めの良さが分かった。ここで、当初計画より5時間遅れていたのも、日の出山からつつる温泉に下る計画を辞め、食料2日分を残し、御岳山ケーブルを使って帰宅することにした。



大岳神社

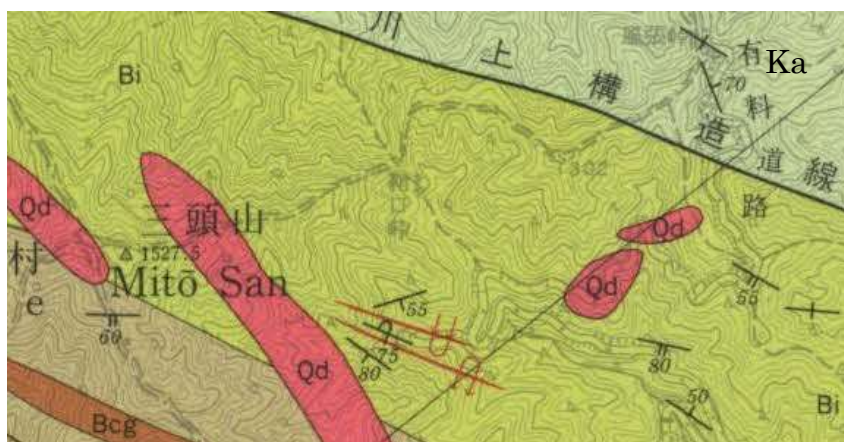


大岳山荘は荒廃が進みつつ見えた。



大岳山から御岳山への道を長く感じた。長尾茶屋で感染防止用マスクを着けた。間質性肺炎の身には呼吸抵抗が増した。

武蔵御嶽神社は 2000 年の歴史があるそう。別格の古さだと思う。ヤマトタケルを案内したお犬様が祀られているとかで、かつて私も飼い犬を連れて犬用の乗車券を購入してケーブルカーに乗ったことがあった。今回も下山の車内に 2 疋の犬がおとなしく乗っていた。初冬の日暮れは早く滝本駅でバスに乗ると暗くなった。



地質図：三頭山～風張峠……………国土地理院五日市図福 GSI MAP G050 から抜粋

- Bs : 砂岩……………盆堀川層／小仏層群／四万十累層群／白亜紀
 Bcg : 礫岩……………盆鴨沢層／小仏層群／四万十累層群／白亜紀
 Qd : 石英閃緑岩……………貫入含類／中新世／第三紀
 Bi : 砂岩泥岩互層……………盆堀川層／小仏層群／四万十累層群／白亜紀
 Ka : 砂岩泥岩互層……………盆鴨沢層／小仏層群／四万十累層群／白亜紀

(注1) トラブル：武蔵五日市駅バス乗換6分の短さが懸念だったが、用を済ませバス停を見ると定刻 9:00 を示していたのにバスは居なかった。都民の森行次便まで 172 分が長いので途中の数馬行きで乗り継ぐ場合の料金を訊くと数馬の先は無料と聞き数馬行きに乗った。しかし、数馬で景色を眺めて次便に乗り継ぐと 1 区間の運賃を請求された。

2. 表妙義縦走記

文責：齋藤壮呉(4年)

日程) 2021/11/5-6

メンバー) 4年齋藤, 3年小田

天候) 終日快晴 微風 行動記録) 6:00 道の駅駐車場 - 6:56 大の字 - 8:42 相馬岳 - 10:40 鷹戻し - 11:45 第四石 門分岐 - 13:00 一本杉 - 13:57 道の駅駐車場

表妙義縦走の話は、9月ごろから出ていた。僕(齋藤)個人としては、あの奇怪なフォルムに惹かれていつか登ってみたいとは思っていたが、案外慎重派なので、手が出せずにいた。今年度はロープの扱いにも慣れてきたし、小田君も赤岳や両神山などを登っており、彼とならいけるのではと思った。10月は大キレットや、僕の間発表があったので、日程は11月に調整した。OBとのやり取りでは、妙義山山域での事故件数の多さ・フォールが前提であるスポーツクライミングとの違い・恐怖を感じる場合にはロープの使用をはばかるべきではないということ・基本を崩さないようにすること・どのような場合でも崩れないような基本を身につけることの大切さ、などについてアドバイスを頂いた。

5日は早稲田祭の準備ということで講義はなかった。妙義山の準備をして大学で少しだけ作業した後、19時小手指の小田君の家で待ち合わせ。風呂だけ借りて車を借りに出た。H20年の日産マーチだった。しばらく使われていなかったのか、アクセルの反応も悪く、ブレーキを踏むとがたがたと揺れた(しばらくすると落ち着いた)。“ニコニコレンタカー“はべらぼうに安い、車が古い。ただ、そんなことも大学生には盛り上がり要素の一つになる。”この車古すぎん!? “と二人でだいぶ笑った。

往路は時間があつたので、3時間かけて下道で妙義まで向かった。夜ご飯は、お好み焼き屋が寄居にあつたので、そこにしようかと話した。12時までやっているということだが、このご時世なので一応電話をしたら、10時から10時半まで子供の習い事の迎えにでているから、その後ならとのこと。めちゃくちゃ個人経営だった。ちょうど10時くらいにつく予定だったので、変更し、近くにあった“かつや”に入った。車の中では、夜のテンションで女の子のことや、女の子のこと、たまに山のことなども話しながら、道の駅妙義にはちょうど0時に到着。あまり寝付けず、寝たと思ったら寒くて起きた。

4時すぎに起きてエンジンをかけて寝るとあつたかくて30分ほど寝坊。6時に駐車場を出発した。朝焼けのきれいな朝だった。空気が澄んで、静かで。やっぱり山の朝はいいなあと思う。紅葉シーズンで、登山者は多く、となりの車は三重ナンバーで山岳会っぽい。どうやら同じルートらしい。

大の字まではスムーズに到達。その後の垂直の鎖場でこれを鎖だけで登らせるのかあと、盛り上がる。小田ちゃんも難なく登ってきてくれたが、少し面をくらっている模様。一応、“やばかったら早めに言ってくれ”と伝え、先に進む。鎖場では毎回2~3人が待っていた。先が見えない鎖場では、前の人が通過したのかわからない。うしろへの声掛けが不可欠である。僕の前の方の声掛けがなかったが、まあ、よい反面教師といったところだ。30mの下降では、スタンスがなく、手に頼らざるを得ない場面があつた。高度感のある稜線が続く。そんなこんなで、気づいたら小田君がちょっとずつナーバスになっていた。長めに休憩をはさみ、落ち着いてから再び進む。普通の山なら鎖があるだろうなあという岩場に鎖がない。一応、ロープを出す。ロ

ープの端にエイトノットで輪っかを作り、カラビナを掛けておくのを忘れていた。ごめん小田ちゃん。後続がきていたので、焦ったのかエイトノットを結ぶのにすこし手間取っていた様子だった。いわゆる鷹戻しでもロープを出した。時短のため、僕はフリーで登り、小田ちゃんをビレイする。鷹戻しでは、後続が来なかったのよかった。

その後の 2 段 25m の下降は懸垂した。僕が先に下り、小田ちゃんが後から下りる。少しセッットに手間取っていた様子だったが、大丈夫だった。正直今回の山行で、一番ヒヤッと したかもしれない。下でおっちゃんが、なんですか、僕らが懸垂しているところの写真を撮ってくれていたとのこと。写真の共有のため、小田ちゃんと SNS を交換していたが、のちのち見てみると、交換に失敗していたらしい。なんじゃそりゃ。(写真は得られず) その後、東岳の手前で間違っ て第四石門のほうに下りてしまった。使っていた YAMAP の地図には分岐が書いておらず、注意していなかった。しばらく進んで、どうにも下っているが、地図には道がないので、何だこの道と思った。事前にダウンロードしていた別の案内図に第四石門へのルートが記述してあったので、そこでやっと理解。鷹戻し、25m の下降が終わり、気持ちが切れていたのもそのまま下ることに。14 時に駐車場に戻った。

紅葉シーズンの道の駅妙義はにぎわっていた。マロン味のソフトクリームを食べた後、高速でサクッと帰京。高田馬場にネギが落ちていた

所感 小田： 日本最難関を謳っている大キレットをクリアできたのだから、妙義の岩稜も大丈夫だろうと考えていた。しかし、表妙義縦走の全体的な振り返りとしては「大キレットの 100 倍 難しい」というのが率直な感想である。計画段階にてインターネット等で表妙義縦走の報告書を読むうちにどうやら懸垂下降等のザイルワークが必要であるかもしれないということが分かり、当時は大キレットに行く前でもあったので、大キレット、表妙義縦走を見越して、斎藤先輩とマルチピッチ、懸垂下降の練習を複数回実施した。結果的にこの練習によって本山行を安全に終えることができた。

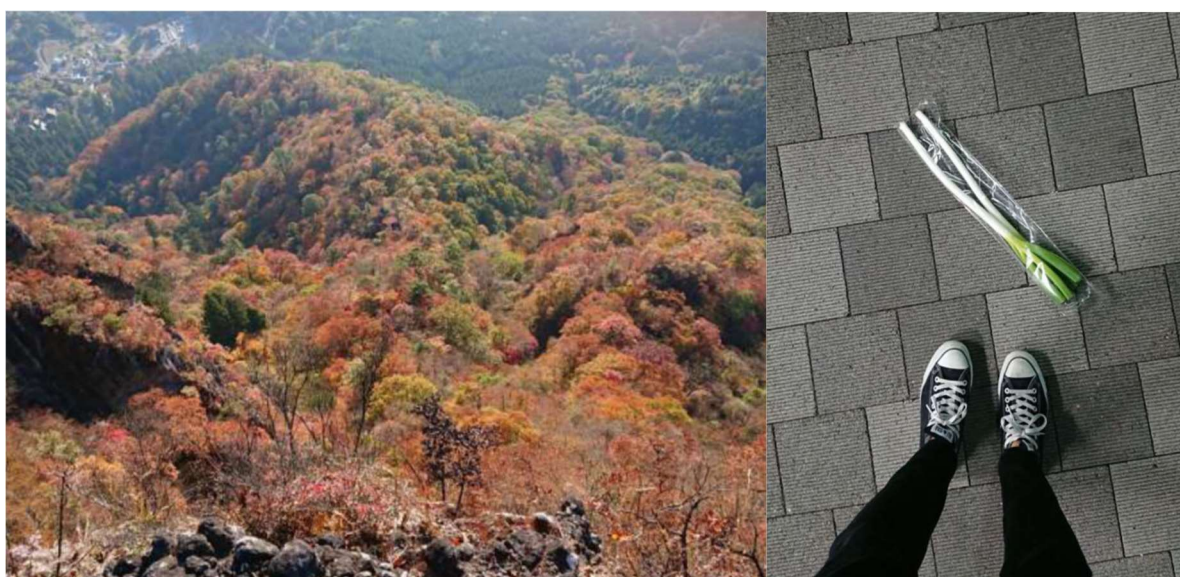
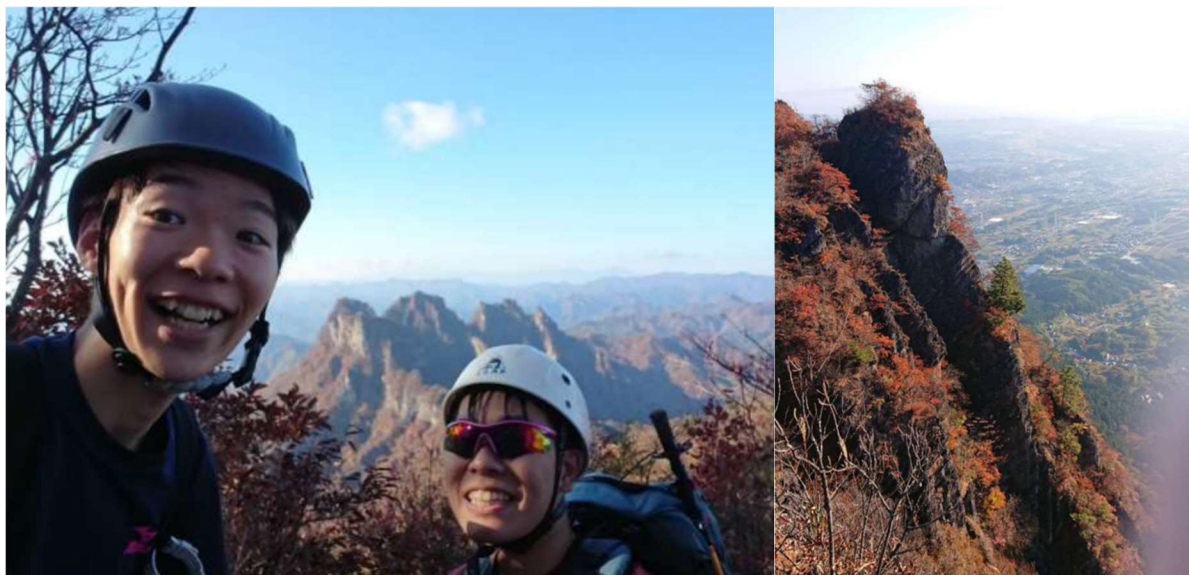
朝、とても寒い中、妙義神社にお参りし、アタックを開始した。大の字までは急登であったが、ここから縦走、下山に入るまではほぼ垂直な岩稜帯のアップダウンが続いた。どこもかしこもホールド、スタンスの安定しない鎖場、岩場(時には鎖がない箇所も…)で精神的にかなり堪えた。表妙義縦走を形容するには「岩場の稜線全てが飛騨泣きであり、長谷川ピークである」という表現が妥当である。私はほぼ全ての鎖場でセルフビレイを行ったほどである。妙義山系はそれほどの難易度の山であった。難所、鷹戻しでは斎藤先輩に上からビレイしてもらい、一步一步、ゆっくりとクライムオンし、なんとかクリアすることができた。その後すぐに 25m 懸垂地点に着き、懸垂下降を行った。斎藤先輩と懸垂下降の練習は事前にはしていたが、長く垂直な岩壁を下降することは初めてであったので、恐怖心から下降するまでに時間がかかってしまった。下降しだすと案外しっかりとできていることが分かり、技術力がついたことを感じた。

以上の振り返りを行った上で、反省点が 1 点ある。急遽、ロープを出す箇所において後続が来ていたことからエイトノットをおろそかに結んでしまったまま、クライムオンして まったことだ。安全確保については絶対に焦らず、確実な行動をしなくてはならないと反省した。全体的に危なすぎる山で全てが難所であったが、終わってみるととても楽しい山行であった。

稜線を歩いているときは「この山、二度と来ねえ…」と何度も考えたが、このようにして本

山行の所感を記述している現在、「もう一回行きたい」と考えてしまっていることが恐ろしい。アルパインクライミングに目覚めてしまったのかも知れない。いつかは谷川岳ーノ倉沢南陵を斎藤先輩とマルチピッチしたいと考えている。夢を現実に変えられるよう、これからも山と真摯に向き合っていきたい。 >いつかは谷川岳ーノ倉沢南陵を斎藤先輩とマルチピッチしたいと考えている。

10 年後くらいでいいから、連れてってくれ。（齋藤）



丹沢山行記

文責：齋藤壮呉(4年)

日程) 2021/12/5

メンバー) 4年齋藤, 1年吉川, 羽山

天候) 晴れ

行動記録) 9:15 塩水橋駐車場 - 11:30 分岐 - 11:54 丹沢山頂 - 12:40 丹沢山頂 - 13:00 分岐 - 14:05 塩水林道 - 14:33 塩水橋駐車場

冬の低山は静かで、葉が落ちている分明るくて好きだ。ということで、12月初旬にどこかいけたらいいなと思い立ち、丹沢山を計画した。塩水橋からは、丹沢山まで一番コースタイムが短いのだが、19年の台風の影響で塩水橋までの道(県道70号秦野清川線)に通行止めがあり、21年に入ってやっと塩水橋までの道が解除された。塩水橋までの運転はだいぶ疲れた。秦野方面から登ったが、ヤビツ峠まではバスが通っており、バスとのすれ違いがあった。また、それ以降はさらに道が細かった。ただ、いまだ、台風の影響で塩水橋以北に通行止めがあり、清川方面からの対向車がなかったので助かった。あと、ちゃんと軽をかりておいてよかった。そういえば、行きに山道のためか助手席の羽山がグロッキーだった。ごめんな。笑

9時過ぎに到着し、先客は5台程度。今回の山行では、山頂を除いて2組4名としかすれ違わず、とても静かな山行ができた。一人で行くのは少しはばかりられるけれど、好きだ。一年生二人もすこしわかってくれたかな?と思う。

台風の影響だろう、荒れているような部分もあった。最初のほうに一か所、登山道が崩れてロープが張られており、たしかにロープがないと通過できないような場所だった。こういった道が続くのかと思ったが、そんなことはなく、それ以降は比較的緩やかな登山道であった。尾根に上がると明るく、歩きやすい道が続いた。しばらく代わり映えない道が続いたが、二人とも高校のときも山に登っていたということで、いままで登った山の話などしながら歩いた。

標高をあげていくと雪のように、斜面に霜がたくさんついており、今シーズン初の霜柱をいっぱい踏んだ。頂上手前には丹沢らしい木道、階段が整備されていて歩きやすかった。また、これも頂上手前だったが、鎖が張られている箇所があり、木が少ない場所で見晴らしがよく、大山や関東平野が一望でき、横浜ランドマークタワーらしきものも確認できた。寒いので休憩は少なめ(5分×3回程度)で、予定よりも1時間ほどまいて山頂に到着。山頂では他のルートからきた人々が10人程度休んでいた。

お湯を沸かし、三人でカップ麺を食べた。いつのまにかうすい雲がかかっており、寒かったが、必要以上に長居してしまった、反省、反省。

下りは塩水林道方面に下りた。急ではあったが、やはり階段などが整備されており、おもっていたよりも下りやすかった。最後に渡渉があり、ほんの少し盛り上がった。下りは林道のほうが長かったはずだが、4キロの林道30分程度で終えた。時速8キロ...? 下りも軽快に歩みを進め、3時間の想定を2時間程度で終えた。来年、日が長くなったら蛭ヶ岳まで行きたいと思う。

所感 吉川：関東平野を見渡せてとても気持ちの良い山行だった。山頂で食べたカップ麺と焼きマシュマロで心が満たされて今年の登り納めにふさわしい充実感だった。



すすきと羽山君と大山と関東平野



焼きマシュマロ



左から齋藤、吉川、羽山



4. 丹沢主脈山行報告書

文責：高橋花菜(2年)

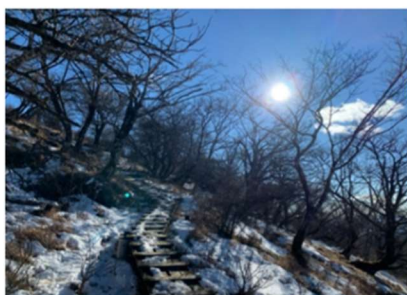
日程:2021 年 12 月 27 日・28 日

天候:両日とも晴れ

メンバー: 高橋(2 年) 小野(2 年)

行程:[1日目]焼山登山口(8:10)-焼山(10:00)-黍殻山(10:50)-姫次(12:10)-蛭ヶ岳山荘(14:00) [2 日目]蛭ヶ岳山荘(7:20)-丹沢山(8:40)-塔ノ岳(9:50)-鍋割山(11:10-12:30)-大倉(15:00)

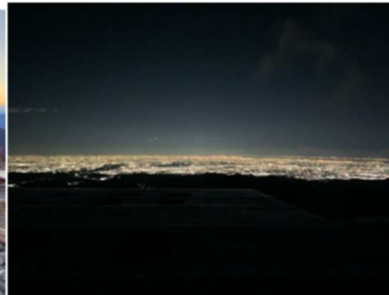
中央線車内で集合し、相模湖駅からバスを乗り継いで登山口へ。焼山登山口から焼山山頂までは急な登りの連続で、ロープが取り付けられている箇所もあった。黍殻山への最後の登りは道が整備されておらず時間がかかった。黍殻山避難小屋で小休憩を取り、姫次へ。姫次は西側が開けていて、富士山の展望が良かった。姫次から先は少し標高下げた後、蛭ヶ岳 直下の 300m の標高差の階段地獄。今回の山行では個人的には蛭ヶ岳直下の急登が最もキツく、神奈川最高峰の風格を感じた。北側斜面ということもあり、雪が登山道脇に残っていた。階段を登り切ると、開けた大展望の山頂で達成感があった。富士山や南アルプスの山々、房総や伊豆まで見渡せた。1 日目は他の登山者と出会うことはほぼなかった。夕食は名物の カレーであった。関東平野の夜景を見に外に出た後、8 時頃就寝した。



蛭ヶ岳山頂直下



蛭ヶ岳山頂と小野



蛭ヶ岳からの夜景

蛭ヶ岳山頂直下 蛭ヶ岳山頂と小野 蛭ヶ岳からの夜景 翌日は 6 時前に起き、日の出を眺めた。山荘に温度計は-10 度を下回る厳しい冷え込みだったが、幸い日当たりがよく歩くと気持ちの良い気候であった。蛭ヶ岳から塔ノ岳への主脈 線は常に右に富士山と雪を被った南アルプス、左に関東平野を見ながらの歩きでとても快 かった。塔ノ岳に計画の 40 分ほど早く到着し、疲労や日没時間などを考慮した結果、鍋割 山へ向かうこととした。鍋割山頂は 12 月末でも混雑しており、1 時間待つて名物の鍋焼き うどんにありつけた。ここまで 2 日間で 20km ほど歩いてきたので身体に染み渡った。落ち着いたところで下山開始。一気に標高を下げた後、長い林道歩きを経て大倉バス停に下山した。 丹沢山山頂と高橋快晴の塔ノ岳山頂名物の鍋焼きうどん



丹沢山山頂と高橋



快晴の塔ノ岳山頂



名物の鍋焼きうどん

5. 雲取山 山行報告書

櫛舎祐太(2年)・海崎真穂(3年)

1. 行動詳細 合計行動時間 11:25 距離 21.8km (平均ペース 130~150%)

1日目 鴨沢駐車場(8:15)→堂所(9:44)→ヨモギの頭(12:08)→小雲取山(12:34)→雲取山頂避難小屋(13:16)→雲取山(13:19)→テント場@雲取山荘(16:00)

雪のない石尾根 鹿の足跡に対抗する海崎 雪の薄い山頂付近 山頂にて 頂上避難小屋はコロナのため緊急時以外に使用することが禁じられていた。頂上避難小屋付近で夕飯のおでんを食べてから雲取山荘テント場に向かったが、16時には到着。やることもなくなったため、翌日は日の出とともに行動開始することに決め、さっさとシュラフへ。

2日目 キャンプ場(7:14)・・・小雲取山(8:10)・・・ヨモギノ頭(8:30)・・・七ツ石山(9:15)・・・七ツ石小屋(9:30)・・・堂所(9:50)・・・鴨沢駐車場(10:55) 朝食風景(お湯をぶちまける3秒前) 朝焼け from テント 山頂巻き道にて。一番雪山らしかった。下山後の幸せ。予定通り計画書よりも早い時刻に行動開始。1日目には七ツ石山へは行かず巻き道を使用した が、2日目の行程にあまりにも余裕があったため行程に追加。

2. 所感 海崎：雪山泊を経験したことがない私が今回の山行で最も心配していたことは夜の寒さであった。元々寒さには強い方ではない。寒すぎて眠れなかったらどうしようと思いながら雪のついた雲取山を登っていった。雪は「積もっている」というよりも「ついている」という程度でありアイゼンの着脱の判断が難しい程であったが寒さは十分で、動いている時はいいのだが止まると寒い。

ご飯を食べている時は暖かいものを食べているはずなのにも関わらず食べ物は冷え、暖まることもできずに悲しかった。私が山で好きなのは景色を見ながらご飯を食べるということだというのに。山で食べるご飯は普段の何倍にも美味しく感じるのだが、朝の急速に冷えたカレーメシだけは山補正でも美味しいとは言えなかった。面白い経験になったが、今度の雪山では食糧についても少し工夫をして、美味しいものを美味しくいただきたい。

櫛舎：今回は、雪山登山というよりは冬の散歩とキャンプであった。というのも、写真のとおりであるが、山頂近辺以外ほとんど雪が残っていなかった。雪遊びを期待して行っただけに残念であったが、この時期にテントで快適に一晚を明かせたことは一つの自信になった。

一方、今回は自身の甘さが露呈した。去年の大菩薩嶺の経験に甘んじていた部分もあり、アイゼンの確認を怠って入山した結果、ねじが片側外れていて、まともにアイゼンを固定できない状況だった。たまたま軽い雪だったからよかったが、去年のようにしっかりと雪山だったらアイゼンに足を取られていた可能性も十分あった。この点に関しては装備の事前確認という意味で、雪山だけでなく、ほかの山遊びでも徹底したい。

・追記 下山後ほうとう屋で美味しいほうとうを頂いていると警察の方がお店の方に聞きこみに来た。どうやら大菩薩山頂付近でザックが見つかったらしい。その方がどうなったのかはわからないが ザックは雪を被っており登山者の方は雪に埋もれてしまった可能性もあるらしく、さらには行方不明者届(及び登山届)も出ていなかったため捜索も進んでいない様子であった。雪山に潜む特有のリスクを肌で感じ、登山届は必ず提出する等、リスクのあることを行ううえで最低限行うべきことを徹底する必要性を認識した。



雪のない石尾根



鹿の足跡に対抗する海崎



山頂にて



朝焼けfromテント



山頂巻き道にて。一番雪山らしかった。

6. 黒斑山記録 20220122

海崎真穂(3年)、小田直輝(3年)

夜行バスで長野まで行き電車で軽井沢、軽井沢から黒斑山近くのスキー場のシャトルバスにお世話になり登山口まで。車で行くにはスタッドレスを履いてないといけなから不便だと思った。しかし、登山口からいきなり雪が積もっているという雪山が初めての私の胸を躍らせた。アイゼン等用意をし、行動を開始する。

30分ほど登ると暑くなりインナー+Tシャツ1枚で快適に感じられるほどだった。さらに30分ほど歩くと槍ヶ鞘に到着。浅間山が綺麗に見えるスポットで、雪の白と空の青のコントラストによく映える。写真を撮ってくれたおじちゃん2人にはTシャツに「山が好き 早稲田が好き」と書かれてることを読まれてしまいなかなか恥ずかしかった。おじちゃんの1人の子供が早稲田の1年生らしいので思いがけなく話が盛り上がった。山の会に勧誘もしておいたがお子さんは山が好きじゃないらしい。私からすると小さい頃から山に連れて行ってもらえるのは羨ましいが小さい頃に連れて行きすぎたからかな、とおじちゃんが言っていた。なるほど、山に巡り合ったのが大学生になってからというのは私にとってもベストだったのかもしれない。(なお私の父親はワングル出身なのに山に連れていかなかったのは山にはまって欲しくなかったのかもしれないが父の思惑通りにはならない)

そんなこんなで小田と2人で記録するに足らないほどの会話をしながら歩いているとトーミの頭が見えてきた。トーミの頭直前の登りが非常に急に感じ、ペースダウンしてしまった。事実、今回の山行で最も急ではあったがさらにしてもペースダウンしてしまったことが悔しい。雪山歩行にも慣れていきたい。

トーミの頭で軽食を取ってから山頂を目指す。トーミの頭直前で疲れたとか言っておきながらおにぎりを食べ少し休んだら元気になり自分の単純さに我ながら驚く。途中浅間山側にトラバースルートを発見し慎重に歩いていったが、この道は本当に気持ちよかった。人は少ないし浅間山は綺麗だし、フォトスポットという感じであった。

あっという間に山頂到着。獲得標高400mしかない上に計画書よりも速く行動していたため本当にあっという間だった。おじさんからガトーショコラをもらいおばちゃん達と写真の撮りあいをする。槍ヶ鞘にしろ山頂にしろ会話はTシャツから始まり、オリジナルTシャツはなかなか恥ずかしいが会話のきっかけを与えてくれる素晴らしいアイテムではないかと思った。話しかけてくれる理由には若いのが2人いること自体が珍しいというのもあるだろうが。

流石に山頂付近は人が多かったのでささっと下山した。下山途中、夏に行った槍ヶ岳穂高周辺が見え、テンションが上がった。槍は遠くから見ても槍だ。それ以外は私には区別が難しかったが槍はわかるから槍に行っておいて良かった。(何か違う気がするが私の登山のモチベーションはこんなもんだ)

行動時間 4 時間弱で無事下山。最後の方は写真を撮ったり雪で遊んだりでペースが落ちたものの、ある程度のペースで帰って来ることができ、いい初雪山山行になった。快晴×ほぼ無風という気象条件に恵まれたことも大きかった。親には言っても聞かないと思われているが(事実聞かない)、元々雪山は禁止されていたのでハマりすぎないように適度に雪山を楽しみたい。さて、今週末の雪山が楽しみだ。



槍ヶ鞘



フोटスポット(?)でキメる小田



山頂でもらったガトーショコラ



下山時雪で遊ぶ小田

7. 四阿山登山記

文責：齋藤壮呉(4年)

日程) 2022/2/11

メンバー) 4年齋藤, 3年小田

天候) 快晴→時折ガス, 時折あおられるほどの風

行動記録) 7:30 あずまや高原ホテル駐車場 - 8:00 平原に出てラッセル開始 - 9:30 ラッセル終了, わかん装着 - 11:10 頃 トレース消失 - 11:30 トレース発見 - 12:17 四阿山山頂 - 13:48 平原に出る - 14:40 駐車場

卒論が終わったので, 深雪を体感するために上田市四阿山に。20年2月雲取山, 3月飯縄山, 21年2月大菩薩嶺, 3月蓼科山, 5月谷川岳等を経て, 6つ目の冬季山行。就活中の小田も参戦。OBの皆様からは概ね「四阿山自体にさほど難しい箇所はないが, 新(深)雪, ルーフイに時間はかかるだろう。ラッセルを楽しんでくるといい」といった内容で計画に対してフィードバックを頂いた。

今回の核心は登山口へのアプローチだった。10日に日本列島の下を低気圧が通過し, 関東でも積雪がある予報だった。当初の計画では一人の予定だったため, 夜行バスなど公共機関によるアプローチを計画していたが, 小田が参加するということで少し安く, 時間もフレキシブルに組めるという利点からレンタカーによる登山口へのアプローチを考えていた。そのため, 積雪への心配は大きく, 当日まで各予報やライブカメラなどいろいろ見た。延期・中止を考えていたが, こういう時にありがたいのが小田の存在で, 良くも悪くも彼は基本的にポジティブでいてくれる。「とりあえずいってみましょうよ」と言ってくれたので, とりあえずいってみることにした。埼玉, 寄居までは路面への積雪はなく。寄居手前のちょっとした峠道で路肩にすこし雪があるくらいだった。寄居から高速にのり, 群馬の横川SA(?)あたりでタイヤチェックがあり, その後, 50キロ規制となっていた。1時半前に上田菅平ICに到着した。下道のほうが積雪が残っており, 路面が白かった。車中泊を予定していたICのすぐ近くにある玄蕃山公園駐車場はすこし坂を上った場所にあり, 細い急坂をのぼらねばならなかった。さかをのぼってみると途中で一瞬タイヤが滑り, それ以上アクセルを踏む気にならなかったのが小田に案内してもらいながらバックした。登山口までの途中にあった西友の駐車場におじゃまさせてもらい, 寝た。寝袋を持って行ったおかげで朝まで暖房なしで寝ることができた。

朝, 6時前に起床し, 路面を確認すると, 前日の夜と変わらずつつるつつしていた。しかし, 地元民がびゅいびゅい通っていくので, 一応通れるらしいということが確認できた。また, 通る車が多く, タイヤの跡で雪氷が減っている様で(対向車線は通る車が少ないのか, まだ白かった)ありがたかった。まだ助手席でシートを倒して寝ている小田をのせて登山口まで移動。時速25キロでのろのろ走ったので, 地元民たちに抜いてもらうために30分間で5回ほど停車した。ハンドルにぶるぶると轍を感じることはあったが, とうにか7時に駐車場に到着。駐車場にはすでに車が4台程度あり, 出発の準備中だった。

自分らも準備をして7時半に出発した。序盤はとりあえずアイゼンもなしで歩いてみた。蹴りだすときに少し滑るが, あまり問題なく歩けた。ためしに途中から前刃つきのアイゼンを装着してみたが, 新雪に刃はきかずに, 蹴りだしは改善せず, ただ足が重くなっただけだった。30分ほど歩くと木のない平原(牧場?)が現れた。雪は深く, ツボ足だと膝下までうまり, 場所によって太ももまで足がはいった。先行者のトレースはあるが, スノーシューやスキーによるものなので, 僕らはズ

ボズボと沈んだ。小田に僕の深雪を味わうという目的があまり伝わっていなかったらしく、黒斑山のような山行を想定していたとのことで、ラッセルに面をくらっている様子で早々に「わかんつけましようよ～」と言っていた。そんな小田と交代しながら1時間半ほどラッセルを続けた。想像以上の雪への沈みと想像以上の体力消耗を楽しんだ。平原ではさえぎるものがないため時折吹く風が体に刺さり、“擬似”森林限界の雪山を体験した気分だった。露出したほほが冷えて痛くなり、ネックウォーマーを引き上げた。ツボ足ラッセルの大変さが体にしみたところでわかんを試してみることに。沈むことには沈むが、ツボ足とは雪泥の差だった。しかし、ラッセルでの消耗からペースは上がらず、ラッセル体験への満足感から「もう帰るかぁ」と言いながらどうにか2200mあたりまで進んだ。そのあたりで下山する中年の男女ペアとすれ違い、いわくガスがかかっている風が強く、その風でトレースが消えているから下りてきたとのことだった。言わなかったがおそらく小田もぼくも下山のためのいい口実ができたかもしれないとほんのすこし考えながら、先に進むと確かに開けて風がつよい場所でトレースが消えた。どうにか2300m付近まで進んでみて、帰ろうと相談し、20分ほど右往左往ラッセルしつつコンパスで方角を確認しながら進んでみると、再びトレースを見つけた。見つけてしまったので、トレースをたどっていき、12時過ぎに四阿山に登頂。

真っ白とまではいかないが展望はなく、山頂に着くと同時くらいに風が吹き始めたのでさっさと下り、木の陰でご飯を食べた。下りは疲れからお互い無口で、ずさずさと雪に足をとられてこけながら、イラつきながら下っていった。下りでも風によって既にトレースが消えている箇所があり、雪山特有の怖さを知った。登りでトレースを失って右往左往しているときの、曲がった僕らのトレースが後続者にも踏まれており、なんというか、少しいい気分だった。平原まで戻ったあたりで雪の深い場所でこけて、抜こうと思ったら疲労から両もも裏がつって、脱出に難儀した。そんなこんなで14時40分に駐車場に到着。すでに道路の雪は概ね溶け切って乾いた路面がのぞいており、あまり気を張らずに運転して帰ることができた。

次の朝起きたら両足えらい筋肉痛だった。10本刃アイゼンの重さや、ラッセル、わかんの体験、擬似森林限界など学びの多い、いい山行だった。やっぱり登山はきついくらいがちょうどいい。



草原に出る 山頂方向には雪



膝高ラッセルの雪壁



ももまで埋まる小田



山頂にて

8. 茶臼岳 山行報告書

文責：海崎真穂(3年)

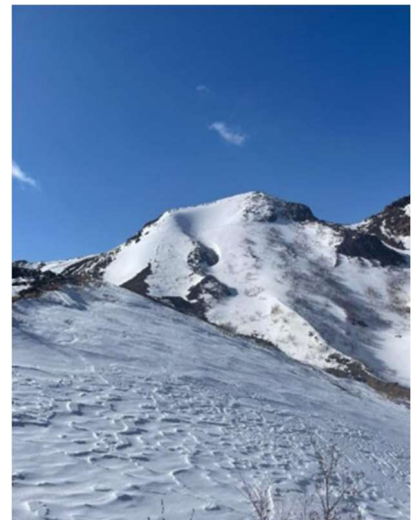
メンバー：海崎真穂(3年) 櫛舎祐太(2年) 羽山航平(1年)

1. 行動概要 合計行動時間 05:30 距離 9.6km 獲得標高 940m 平均ペース 130-150%
2. 行動詳細 09:24 大丸温泉バス停・09:45 山麓駅・09:59 登山口・11:25 茶臼岳(那須岳)・12:49 朝日岳・13:42 剣が峰・14:30 登山口・14:38 登山口・14:56 大丸温泉バス停

山麓駅までは蛇行する一般道をつっきる形で、地図を参考にしながらトレース跡を踏む。那須岳まで3.0km。道標が埋まっているけれども山頂までの距離はちゃんとわかるのがうれしい。山麓駅から少し進むと登山道。しばらくは緩やかな道が続き、のんびりと進んでいける道だったが、やはり動いていると暖かくなる。まだ風が強くないため尚更だ。登山口から30分ほど上ると少し風が強くなった。風が強いという情報は事前に入れていたため驚くほどではなかったが、いよいよ始まるという感じがした。シュカブラを見つけていい表情。



ここからは景色も開ける。風が強いがゆえに雪がところどころなくなっていて、アイゼンが地面と干渉してしまうのが気になった。慎重に歩みを進めていく。峰の茶屋からは景色を堪能していたらすぐ茶臼岳までついた。夏の山も美しいが冬の山も美しい。風も強いが、煽られるほどではないし、顔は冷たいがネックウォーマーなどでどうにか対応できる程度であった。そんなこんなで山頂到着。山頂及び山頂付近は雪の方が少なくとうとうアイゼンを外したが、2000m付近で雪がないということが面白く感じた。この時点で雪山をきちんと満喫できたため朝日岳の方には行かずさっさと下山して制動訓練まがいのことを行うという選択肢もあったが、峰の小屋から見えたトラバースルートが気になった、かつ時間に(男どもは体力にも)余裕があったため朝日岳に向かうことにした。峰の小屋からトラバース。夏場には朝日岳までの正規登山道として使われている道だが、踏み固められている場所は限られておりそこを辿っていく形であったため、こままでの歩き方とは少し異なり集中してあゆみを進めていく。奥(剣が峰)にトレース跡を見つけて撮ったのが右の写真。



トラバースが終わったらあとはひたすらに登っていく。茶臼岳よりも急斜面の区間が少し長く、斜面方角的に雪も緩くなっていた。朝日岳山頂の写真。

ちょうどこの時は風がやんでいたためカップラーメンを食したり、雪合戦をしたりとのんびりとしてから下山した。雪がさらに緩くなっていたため、南側斜面のトラバースルートを使用することを少し不安に思ったため剣が峰登頂ルートから下山した。

下山はあっという間で途中にボトルを落として取りに上るなどのイベントをはさみながらも1

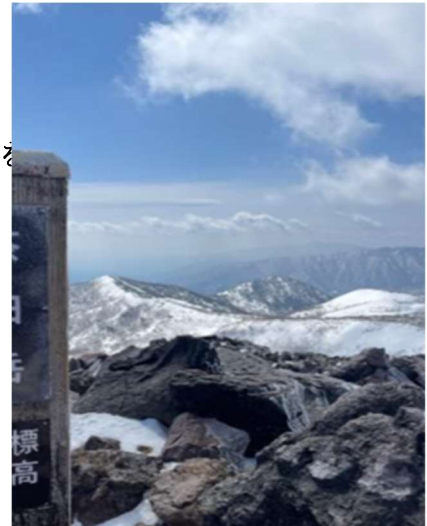
本前のバスに無事乗れた。バス停付近では度々一般道に出るためアイゼンを履いたままでは歩きにくいと感じ外してみたがそのまま雪の上を歩こうとしたところきちんと滑りアイゼンの力を感じた。

3. 所感 海崎真穂：今回は、私にとって初めて自宅から車で行った。前日も体力を消耗していたこともあり下山後にも家に帰るまでの緊張感があったため、小学校の先生によく言われた「家に帰るまでが遠足」という言葉を初めて身に染みて感じた。眠くならないかという懸念は杞憂に終わり、結果夜のドライブは当日の山行を振り返るよい時間となった。

ドライブ中考えていたことの1つはトラバースルートのことだ。夏山の正規ルートだが、冬には完全に登山道が雪に覆われトラバースをすることとなる。幸い踏み跡が残っていたが、そこまでのルートとは違う緊張感があった。トレースがどこまで続いているかをスタート地点からは確認できなかったため先頭を進むのは少し怖かった。それ以上に楽しかったが。同じ場所でも怖さと楽しさどちらが勝つかは人によって違うため無理に誘うことはできないが山の会内で雪山人口を増やしたいと感じた。

もう一つ考えていたのはシュカブラのことだ。天候に恵まれ、あまり風の影響を受けないで風による産物シュカブラを見るのはズルをしているような気分になる。シュカブラの向こうに山が見えるのは長年かけて自然が作ってきたものと今年一年だけで作られたもの両方が見られたため、山の景色の中でもなかなか好きな景色であった。いずれにしろシュカブラを見るとというのが私にとって今回の山行の目的だったのでこれを達成できたのは嬉しい。

今回の山行も学びあり楽しさありの充実した山行であった。これからも色々な山に行き、アイゼンでの歩き方等習得していきたい。



羽山航平：(珍しく?)快晴!!ベストのコンディションでの初雪山でした。トレースがしっかりついていたので、サクサク登れました。茶臼岳のほうはなだらかな斜面で登りやすかったです。山頂はプチ溶岩ドームのように なっていて黒くゴツゴツした大岩がたくさん転がっていました。

朝日岳のほうは、険しい斜面が多く、少しヒヤッとする場所もありました。 山の色は全体的に大涌谷の噴気孔周辺のように茶色く、火山なんだなぁと感じさせる山でした。

帰りのバスで、最近ニュースで割れて不吉だとか言われていた殺傷石を見れて感動しました!(ここにあると知らなかったの) 自分にとっては初めてのちゃんとした冬山登山だったのですが、初めてにしてはいいペースで登れたと思います。一方道中、アイゼン同士が引っかかって転びそうになることが 何回かあったり、ピッケルを持つ位置が斜面側になっていなかったりしたので、技術的には改善点(伸び代?)があるなぁと感じました。

冬的那須岳はバスがなさすぎて公共交通機関だけだと到底行けないので、今回車で連れてい

ってくれた先輩方には感謝です！今回、雪山の妙味はかなり味わい尽くせたと思うので、今度は低山(筑波山、妙義山、御岳山など)行きたいなぁと計画、考えております！

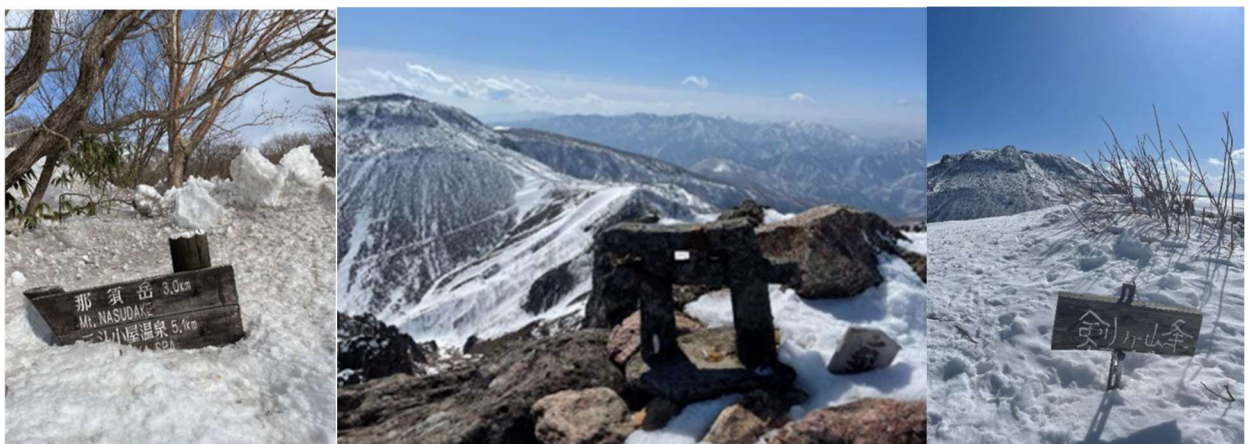
櫛舎祐太：雲取山は雪が薄く、実質今シーズン初めての雪山登山だった。標高、斜度は共に高くなく、とても楽しい雪遊びだった。深夜、海崎さんの迎えを待つ間は寝落ちしないか心配であったが、他の作業をしていると時間になった。その後運転を代わり那須塩原まで。前日丸一日活動していたため熟睡。その後も行き帰りのバスでは熟睡。始発から終着に乗ると何も気にしないで寝れるのでよかった。

バスを降りるとすぐ雪道になっていて少しテンションが上がった。斜度もゆるく、のんびりしている間に小屋まで着き、その後も難なく茶臼岳へ。シュカブラが綺麗だった。稜線に出た時はやはり風を感じたが、思ったほど寒くなかった。貧乏ハイカーなので、別のサークルで乗るゴーカート用の、コロナ対策のヘルメット用マスクをバラクラバにしてみたが、普通に風を防いで快適だった。多少の風ならこれでどうにかなりそうであった。

朝日岳へはトラバースルートと丘越えルートがあり、行きはトラバースを選択した。谷川岳のトラバースを思い出すとそこまで(歩きにくさもだし高度感も)キツくなかった。どうやら自分は前にキツかった山行を思い出して頑張るタイプのようだ。朝日岳には無事到着し、帰りにまたトラバースするか丘越えするかで、もう一度登るのが面倒だったのでトラバースを推したが、気温上昇で雪の状態が不安との海崎リーダーの判断で丘越えルートへ。その後下山したが、途中で腰のお手製ボトルホルダーに付けていたボトルがないことに気づき、空荷で小屋まで戻った。丘の下りで靴に雪が入ったのを落とした時に落ちたようだった。

今回はレインのズボンの裾を絞れるのでゲイター無しでいいかな、と思ったが、それは失敗だった。そんなアクシデントを挟んでも無事一本前のバスに乗れ、急に入ったバイトにも余裕で間に合うことができた。今回はのんびりでき、とても良い山行だった。

天狗岳も天候不順で流れたし、忙しくて今シーズンの雪山散歩は霧訪山で終わりになってしまいそうで、ステップアップのためのチャレンジができなかったことは少し悔やまれるが、総じて楽しいシーズンだった。



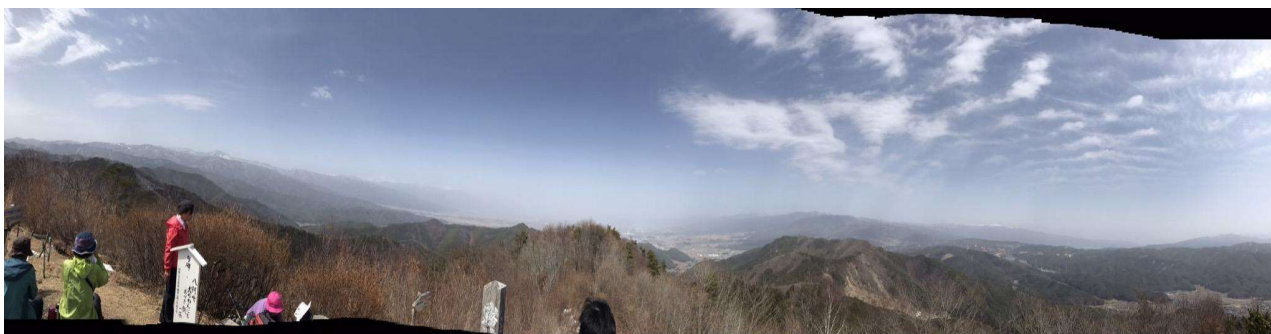
9. 霧訪山山行報告書

文責：櫛舎祐太(2年)

3/16 櫛舎祐太(2年) 海崎真穂(3年) 佐藤志龍(2年) 羽山航平(1年)

1. 行程

集合 8:30@道の駅八王子→10:30 行動開始→1025m ピーク 11:05→霧訪山・大芝山分岐
11:54→霧訪山 12:07



昼食休憩 40min→分岐 13:00→大芝山 13:39→駐車場 14:45

2. 所感 櫛舎：

今回の霧訪山は、先日悪天候で天狗岳を延期する際に、全員が揃う泊の日程が確保できず、やむをえず日帰り雪山山行にし、決定した。そのため、雪遊びする気満々で行ったのだが高速上でも塩尻 IC を降りてからも嫌な予感はしていた。

今回は道の駅八王子滝山集合であった。電車勢を佐藤の車で回収し、全員が一台に乗って高速で登山口までいく、という流れの予定のつもりだったが、連絡ミスにより 2 人とも直接道の駅に向かってしまった。そのため、出発時間が遅れ、ルート変更を余儀なくされた。

櫛舎は運転をしていたため、羽山・海崎の提案した定番ルートを通ることに。在京連絡人に連絡し、霧訪山登山口へと向かった。

登山口につくと、狭い駐車場が埋まりそうで、里山一位のパノラマビューとして有名になっただけのことはある、と感じた。

ここまで雪はない。それどころか春の陽気を感じる風すら吹いている。ここになにをしに来たのだろうか。

結局雪はごく一部の日陰にしか現れなかった。

そのため、アイゼンの付け外しが億劫に感じた。周りの登山者を見ても 10 本アイゼンなど誰もつけておらず、チェンスパイクがここには正解だと感じた。

山頂では日本アルプスの山々から八ヶ岳まで望め、雪化粧が綺麗であったのと同時にいくつか登った山があり、なんとも言えない気持ちになった。

最近調理が面倒でカップ飯すら作らないが、今回は持ってこなかったことを後悔した。下りでも雪はあまり現れず、今後計画する際に装備を見直す必要があると感じた。

今回は後藤さんのアドバイスで読図技術を身につけようと、まずは YAMAP と今いる地点を見比べ、周囲の特徴的な地形や構造物から自分の位置が地図上と変わらないことやその先のルートの方向やキツさを予想していた。とても楽しかったし、万が一を考えるとオフラインで地

図を使える状況はとても大切だと感じた。

大芝山山を通過してからは人が入らないためかトレースも薄く、夏山の登山道と思われる場所や通りやすそうな場所を地図と周囲の地形とを見比べながら下っていった。

小さなコルで現在地をしっかりと確認出来てテンションがあがった。また、尾根の分岐では冬の尾根選びのわかりにくさを少しだけ感じ、本で学んだことを確かめられた。

展望がよいと聞いて登りたかった山に登れ、しっかり景色も満喫でき、様々な学びを得られる、良い山行であった。距離的に気軽に新歓ができる山ではないが、何かの機会にまた来たい。

海崎：

霧訪山はアクセスさえ良ければ新歓で訪れたいと感じる山だった。山頂は 360 度開けており山が見え、流石長野だと感じた。

個人的には登り始めをととてもキツく感じ、パーティーのペースについていけなかったことがこの山行の中で一番強く残っている。特段疲れが溜まっていたというわけでもなく明確なことはわからないが、私の中では朝食に影響されやすい説が浮上している。他にもいくつか要因が考えられるため、夏にでも縦走に行きたいと思っている以上基礎体力をつけるだけでなく、コンディショニングの整え方を把握することも不可欠だとわかった。

また、分岐のわかりにくい場所があったことから、地図を見ることについても考えた。普段から YAMAP を使っているが故に GPS 情報に頼りっぱなしだが、なんとなくではなくきちんと地図を読めるようになりたい。今度練習にでも行こう。

季節が進み十分に暖かかったため雪はあまり残っていなく、難易度がとても高い山行というわけでは無かったが、学びのある山行だった。同じ山でも季節やメンバーが違えば違うし、似たような経験はあってもその時々だから気づくことがあるはずだと感じる、面白い山行経験ができた。

佐藤：

雪山！！と期待していたが連日の暖春により雪は解けているところが多かった。日帰りで上るには十分すぎる山で翌日に疲れを持ち越さない程度に楽しめた。赤岳に登ったメンバーで久々に登れて佐藤は非常に満足した！！

羽山：

霧訪山までの道中、南アルプスと八ヶ岳が綺麗に見え、気分が上がった。霧訪山自体は軽く登れる山で、多少残雪はあったものの、晴れていて気持ちのよい登山ができた。奥多摩の暗い杉林ではなく、松と低木の生い茂る森で、歩いていて心地よかった。登っているときはアウターを着ているのでは汗をかくほど温かく、春の訪れを感じた。なかなか行く機会の無い山なので、今回行けていい経験になりました！

「

10. 水無川本谷遡行記

文責：齋藤壮呉（4年）

日程）2022/3/20

メンバー）4年齋藤，3年海崎，2年櫛舎

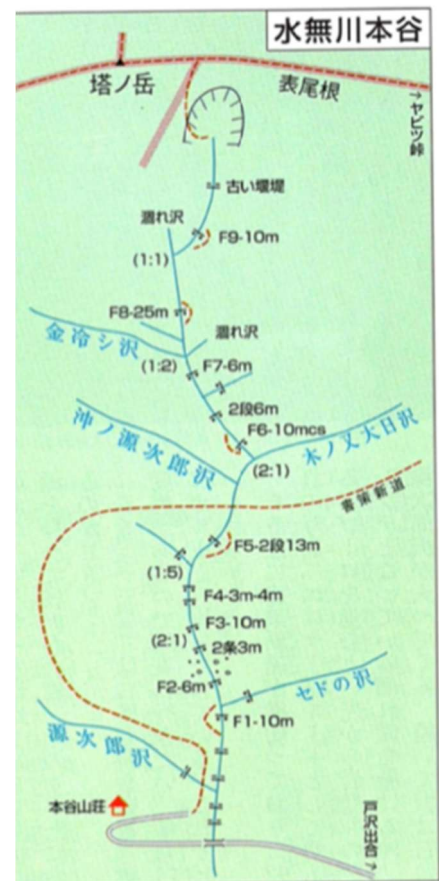
天候）曇りときどき小雨，微風

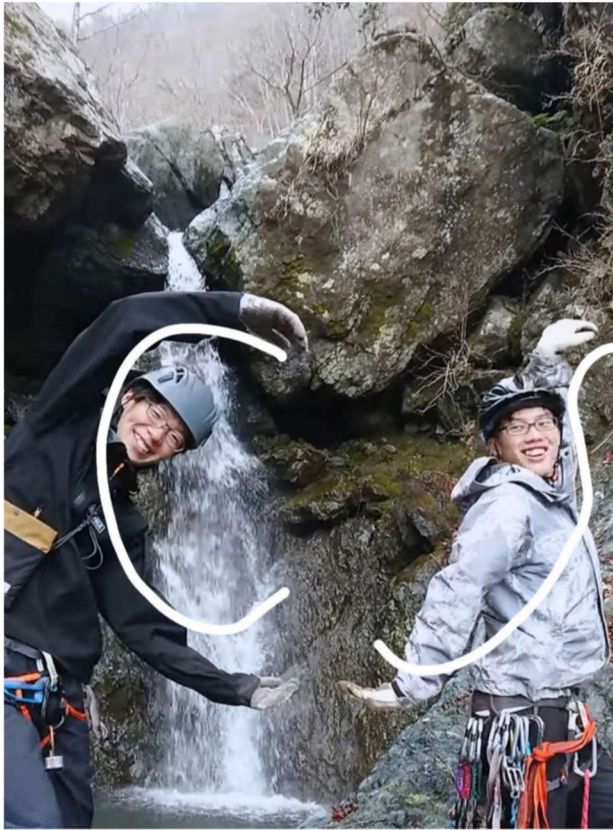
行動記録）10:45 戸沢山荘駐車場 - 11:15 F1 - 13:15 F5 上 - 13:35 F6 - 14:15 遡行終了
- 15:15 下山開始 - 16:00 戸沢山荘駐車場

近場で面白い山に登りたいなと思い，あるルートから手に入れた「ヤマケイアルパインガイド11 丹沢」をめくっていたら，濡れずに登れるという水無川本谷を発見。数名に声をかけて，3年海崎と2年櫛舎が参加。前日，前々日の雨が気がかかりだったが，水量は問題なかった。戸沢山荘までの林道がぬかるんでいて車は汚れた。戸沢山荘から塔の岳のあたまで見るとの情報があったが，あいにくの曇天で見えず。装備を整え，10:45に出発。

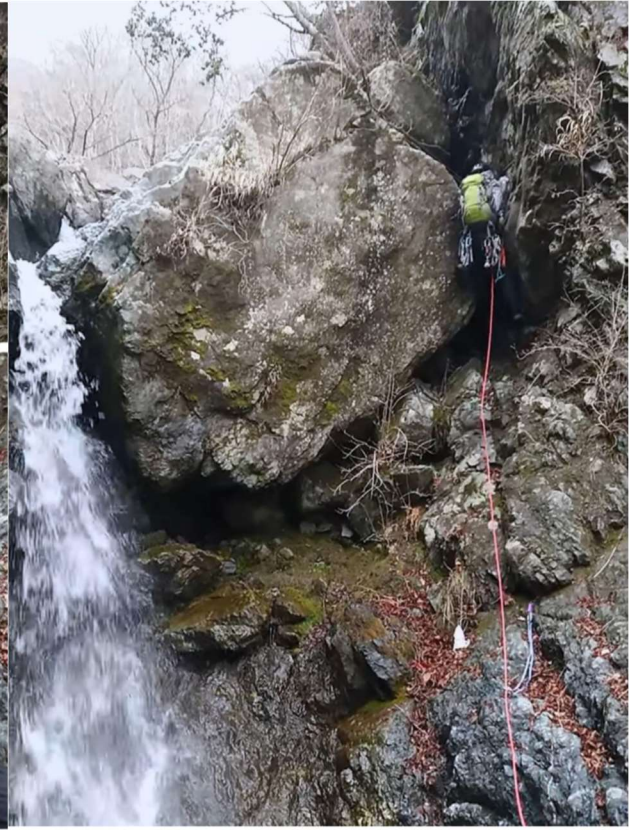
F1への途中にあった堤防を越える際に，事前に情報のなかった渋めのトラバースに遭遇。まだ入渓前なのに軍手がどろどろに。F1は事前の情報通り右岸の鎖を使って越える。すぐにF2が現れる。水流右の壁を登る。

足がみあたらずのっこすところでしばらくもぞもぞしたが，腕力でどうにか上がった。自分が登るときに怖かったので，後続には一応ロープを出したが，案外すんなりのぼっていた。F3手前のなんでもない2m程度の小滝で，超えるにはどうしても水に足をつっこまねばならない様だったので，面倒に思いながら左岸の小さな岩溝を登る。なんでもない小滝を巻く人は多くないだろう，浮石だらけで難儀した。岩溝をずっと登っていったらずいぶん高くまで巻くことになってしまったが，どうやって沢にふっきしようかと議論している時間が沢登りっぽいなあと思いながら，傾斜の緩やかなところを通り，沢に復帰する。すこし進むとF5があった。水流右の鎖が上部のみちょこんとついていたが（以前はもっとしっかり鎖があったらしい），そこまで行ける自信がなかったので左岸を巻く。巻きのルートも少々高度感があるので，一応ロープを出す。落石の当たらないような場所で待つように言い，木にゼロピンをとってから登る。想像以上に声がおとなかったので大声で合図を出し合いながら，無事通過。巻きや確保に時間がかかったように思ったが，F5上までの時間は案外計画に記したとおりで安心した。しかし，ぽつぽつ雨がふっており山頂へぬけても真っ白であろうこと，懸垂下降などの練習もしたいことから書策新道での下山に変更。F6のCSは登りたかったので，F6にて遡行終了を決定。F6はCSの右をのっこすが，残置のロープに頼らなければ登れず，三人ともすこし悔しい思いで，また夏の天気の良い日に挑戦しにこようと話しながら下山。途中ちょうどいい斜面で懸垂の練習などしながら16時戸沢山荘に戻る。





ふたりでCS (チョックストーン) 左 齋藤・右 柳舎



F6 柳舎リード(画像左上が白飛びしているが雪ではなくガス)

後記 “あるルートで手に入れた”というのは、友人の父が若いころ、よく山に登っていたということで、家にある関連の雑誌などをよく借りている。昔に撮った登攀中の写真を見せてもらったときに、やはり写真に残しておくのはいいなあと思った。一方で、自分は沢登りや去年の妙義山などバリエーションルートでは手の汚れや濡れ、落とすと一発アウトな場面が多いことへの懸念からあまりケータイを出さないため写真が少なくなってしまう。今回の山行でも動画が一つあるだけだった。防水のデジカメを買ってザックの肩ベルトにつるしておこうかと考えている今日この頃。その友人の父は小説もよく読むらしく、本棚に面白そうな本がたくさん並んでいたの、春休み中に何冊か借りて読んだ。戦後日本のクライミングと第2次RCCの発展を描いた”喪われた岩壁”や、山野井さんの”垂直の記憶”，加藤文太郎の”単独行”など。読んでいく中で、山野井さんのソロクライミングのシステムはどうなっているのか、ハングした場所でどうやってピトンを打つのかという疑問を持って、いろいろ検索してみてもどうにも答えがわからなくて最近眠れないでいる。

IV 我が国の登山史をつくった岳人列伝その3：小島烏水

金子治雄（S41 年卒）

主な著作「日本アルプス」小島烏水著、近藤信行編 1992 年刊
実は小島烏水の著作は、60 歳を過ぎるまでほとんど読んだことはありませんでした。それは私だけでなく多くの人もそうだと想います。その訳は、それまで烏水の著作をコンパクトにまとめた書物が無かった事と、烏水の紀行を収録した山岳全集では、代表的な著作として文語体の「槍ヶ岳探検記」が必ず掲載されていて、その読みづらさから烏水を敬遠してしまったことが挙げられます。



しかし歳を経て、烏水の「日本アルプス」や「アルピニストの手記」などが文庫本で出版されましたが、それらを読むと、あの文語体の印象が強い烏水が、現代の私たちと変わらない感性の持ち主で紀行文も面白く、明治の山が急に近くになった印象を持ちました。

烏水は和洋折衷の教養人でした。横浜生まれの少年時代から旅の記を好み、苦学しながら横浜商業を出て横浜正金銀行に就職しました。共にウェストンを訪ねた岡野金次郎はスタンダード石油の社員でした。2人は仕事柄英語を勉強しましたが、烏水は江戸期の地誌類や浮世絵などの風景画に興味を抱き、青年文学雑誌に紀行文、文芸評論、歴史、時事論文などを寄稿していましたが、その後急激に山に傾斜し、明治35年槍ヶ岳に登り、その縁でウェストンと出会い、彼の勧めで日本山岳会を設立しました。

烏水は日本山岳会の設立趣意書に、山と自然を、科学、文学、芸術の対象としてそれを究めるのが永世の大業であるとしたためました。そうして日本山岳会には、西欧近代登山の導入と、烏水の唱えた新しい山岳文化の創造に共鳴し、文筆家、植物学者、俳人、画家など多彩な人間が結集し、新しい登山活動と共に、機関紙山岳を中心として、山岳紀行、山岳研究、山岳画、山岳写真など、それまで我が国に存在しなかった山岳を取り巻く新しい文化が創造されました。

その最も顕著な出来事として、烏水によって、我が国で初めて紀行文という新しい文学ジャンルが始まりました。

以前、江戸期の旅を知ろうと書物を探した際、奥の細道や、東北を旅した菅江真澄、蝦夷地の松浦武二郎等を除いて、名所案内はあるものの、紀行文というジャンルが無く、ケンペルやシーボルト、或いはアーネスト・サトウ、イザベラ・バードなどの来日外国人の著作による以外は、江戸の旅は一般には知りえないことに気が付きました。

我が国に近代西欧的な紀行文が現れたのは、明治中期になって、西欧近代地理学を学んだ、地理学者志賀重昂の登山の気風を興作すべしと唱えた「日本風景論」が最初です。「日本風景論」は多くの明治の青年たちに熱狂して読まれました。烏水もその1人で、この著作がきっかけで浅間や乗鞍に登り、槍ヶ岳を遠望したところから烏水の登山が始まりました。また当時仙台二高の学生だった小暮理太郎は、仙台の書店ではいくら待っても、本が手に入らないため、上京して手に入れ、その足で着物を端折って信州の山々に足を踏み入れています。

現代の私たちは、山岳紀行や山岳写真、絵画を当たり前のごとく受け入れています、西欧世界において、登山や探検は18世紀から19世紀にかけて近代科学の発達に合わせて始まった行為でした。この時代は見たもの何でも克明に観察し分類する、博物学的な自然科学の要素が強かった時代で、風景画や銅板の画像も風景写真の走りも、この時代から始まりました。こうした近代西欧思潮は、明治の青年たちを魅了し、鳥水初め岳人たちは山河跋涉しながら、口語自由詩のように形に囚われない自由な感性で紀行文をしたため始めたのです。

こうした流れが、日本山岳会だけにとどまらず、やがて学校旅行部や山岳部を初め、多くの山岳団体が結成され、その活動が部報、会報という形で編集され、登山と記録や紀行文は一体となって育まれ登山活動を一層活性化してきました。今日でも稲門会通信など会報を楽しんでいるのは、当時山岳会に結集した岳人たちの新しい山岳文化創造の果敢な行動の賜物です。

後年、山岳紀行のジャンルを確立したと言われた田部重治は、その著作において、我が国の山岳紀行の中で、鳥水の影響を受けていないもの皆無であると言い切っています。近藤信行はまた田部の著作「山と溪谷」以降、我が国に現れた山岳紀行文のほとんどが、田部の影響を受けているとも述べています。更に、多くの人が理想のアルピニストとして仰いだ大島亮吉は、その著作の中で、慶応大学山岳会の第5回大会での田部の講演に多大な影響を受け、以後の自己の登山の方向性を見極めたとも言っています。

フランス文学者で京大チョゴリザ隊長の桑原武夫は著書「登山の文化史」の中で、登山とは文化的行為であり、文明人のみならず行為であると述べています。私たちは過去の多くの岳人たちから、その著作を通して大きな精神的遺産を引き継いできました。登山が単なるスポーツや健康維持の手段に過ぎないとしたら、精神的遺産など生まれることは無かったでしょう。その意味で小島鳥水は偉大な岳人でした。

小島鳥水、明治42年白根山脈縦断記より抜粋

岩の裂け目に高根薔薇が紅を潮して咲いているのを発見した。匂いがいかにも高い。私はこの時ほど高山植物の神秘に打たれたことはない。中略、ほとんど花を摘み取ったことのない私も、この時は白根・赤石の荒神たちも許せたまえと、1輪をポケットに秘めた。セガンティーニがアルプスの夏の雪中で薔薇を発見し薔薇の葉という名画を描いた。それは白い雪の中から薔薇色の頬の愛らしい乙女が顔を出して

涼しい眼を瞬いている。あの高根薔薇は私には永久に忘れられない花の一つである。

次回、岳人列伝その4は田部重治です。

